

『フェンスレス』オンライン版（創刊号） ● 特別付録 資料

総目次
『プロレタリア文学』（白揚社）

146

『進歩』（現代文化社）

151

『エクリバン』（エクリバン社）

164

『プロレタリア文学』

白揚社発行

昭和五年六月〜昭和五年八月(全三冊)

第一巻第一号 昭和五年六月号 五日発行

— 創刊号 —

労働か賃金を！ (* 犀カット)	ア・リベデインスキー	1
党員	武田麟太郎	2
浜番人	立野信之	8
前衛の父	鹿地亘	17
支那の同志よ (* 詩)	不二純二	25
都会地図の膨脹	佐左木俊郎	26
幸福な老人	貴司山治	38
近頃の感想 (評論)	片岡鉄兵	50
『太陽のない町』と僕	徳永直	55
プロレタリア・レアリズムの諸問題		57
プロレタリア・レアリズムと形式	小林多喜二	58
農民文学とプロレタリア・レアリズム	立野信之	61
詩とプロレタリア・レアリズム	上野壯夫	64
児童文学とプロレタリア・レアリズム	猪野省三	68
演劇とプロレタリア・レアリズム	村山知義	72

プロレタリア・レアリズムと大衆化	田辺耕一郎	75
われらのメーデー	足立国松	78
階下の同志	ヨハネス・エル・ベツヘル / 長野兼一郎 訳	79
労働祭挿話		83
メーデーと少年 (東京)	山田清三郎	84
春のカンパニヤ (大阪)	久板栄二郎	92
動乱の五月節 (上海)	井東憲	102
鍬と鎌の五月 (農村)	黒島伝治	107
芝から上野まで	橋本英吉	111
芸術派・批判		111
芸術派なるものは存在せず	小堀甚二	114
芸術家は自由であるか?	川口浩	115
芸術派の正体 — 反芸術派・宣言その1 —	木村利美	117
所謂「芸術派」に就いて	中本たか子	123
芸術派に関して	高見順	125
エロチック文学について	平林たい子	126
スウル・レアリズム批判 — そして一般に		128
革命前期小ブルヂオア反動的諸流派の特質について	小宮山明敏	132
解団式 (* 譜面)	白須孝輔 作詞 / 守田正義 作曲	131
友を呼ぶ — 幼時の記憶をたどりて (* 詩)	窪川鶴次郎	133
××インターナシヨナルへ (* 詩)	長谷川進	133
獄窓通信 (* 詩)	白須孝輔	134
解団式 — この歌曲を東京交通労働組合の同志に捧ぐ — (* 詩)	白須孝輔	135
国際芸術ニュース	編輯部	145

ソヴェート・プロレタリア文学の方向（ロシア・プロレタリア作家聯盟総会の決議）
 感心した作品・その理由

黒田辰男	立野信之	小林多喜二	江馬修	平林たい子	阪井徳三	越中谷利一	小宮山明敏	中本たか子	小牧近江	橋本英吉	壺井繁治	藤枝丈夫	田辺耕一郎	鶴田知也	秋田雨雀	間宮茂輔	土井逸雄	白須孝輔	貴司山治	楨本楠郎	木村利美	窪川鶴次郎	鈴木清次郎	鹿地亘	
146	154	154	154	154	154	154	155	155	155	155	156	156	156	156	157	157	157	157	157	158	158	158	158	158	158
153	153	153	153	153	153	155	155	155	155	155	156	156	156	157	157	157	157	157	157	158	158	158	158	158	159

編輯だより

第一卷第二号

昭和五年七月号 五日発行

新作家二〇人集

犯人捏造
 兄の同志に送る手紙
 工場地帯小景（一場）
 何処にもゐない男
 熊の沢石炭山の報告

田口運藏	川口浩	高見順	須山計一	上野壮夫	宮木喜久雄	今東光	岩淵威夫	山田清三郎	徳永直	黒田辰男	奥村五十嵐	山内謙吾	記者	橋本英吉	壺井繁治	久板栄二郎	小島勲	本庄陸男	
159	159	159	159	159	160	160	160	160	160	160	160	161	161	2	7	12	17	22	27

工場の前衛	中本たか子	28
石垣の下	間宮茂輔	34
鐘	小野勇	39
異国の土	西沢隆二	43
耕地区分表	細野孝二郎	48
会社あらし	鈴木清次郎	53
少年党員	榎本楠郎	57
少女	大森二郎	62
体	河崎長	67
闘士とその妻	越中谷利一	70
検束された彼	岡下一郎	76
密漁組合	鶴田知也	80
大臣の首	山内謙吾	84
山峡の動き	猪野省三	88
少年	田辺耕一郎	93
国際芸術ニュース(A) ソウエートの映画		99
「大地」		
国際芸術ニュース(B) イギリスのプロレタリア文学		7
国際芸術ニュース(C) 日本のプロレタリア出版		87
マクシム・ゴリキイのソウエート同盟に於ける地位について	秋田雨雀	92
社会民主主義と作品	立野信之	104
平林初之輔氏の理論の反動性	山田清三郎	108
(*案内、「第四回国際消費組合デー」七月第一土		113

曜日(五日)／東京市外大島町関東消費組合)		
報告文学 (Reportage) に就いて	川口浩	114
汽車の中のソウエート・ロシア		115
エゴン・エー・キツシュ／川口浩訳		
原稿応募規定	編輯部	115
断想三つ	江馬修	126
国際芸術ニュース(D) ドイツ消息二三		131
作家論		127
小林多喜二の印象	鹿地亘	132
「窪川いね子」の一面	宮木喜久雄	137
(*案内、「大衆座公演予告「鉄仮面」／左翼劇場公演予告「反乱」)		134
機械と文学形式 ―一つの方法論的素描―	木村利美	144
現代マルクス主義文学講話(1) マルクス主義文学の発生過程	小宮山明敏	145
作家論 二人の作家	西田伊策	151
新刊・批評・紹介		152
市街戦……橋本英吉(*転載)	立野信之	153
暴力……武田麟太郎		153
キヤラメル工場から……窪川いね子		154
黒い地帯……佐左木俊郎		154
生活の旗……藤沢桓夫		154
軍隊病……立野信之		155
朝の無礼……中本たか子		155
工場労働者……岩藤雪夫		155
炭坑……橋本英吉		155

熊の出る開墾地……佐左木俊郎									
赤い魔窟と血の旗……井東憲（*転載）									郡司次郎正
勇敢なる兵卒シユベイクの冒険……ヤロス ラフ・ハーシエク、辻恒彦（訳）									156
鉄の流れ……セラフイモイツチ、蔵原惟人（訳）									156
マルキシズム文学論……青野季吉									156
芸術社会学……フリーチエ、昇曙夢訳									157
ストライキ宣言……白須孝輔									157
赤い旗……榎本楠夫									157
編輯だより									158

第一巻第三号 昭和五年八月号 五日発行

赤色スポーツ									徳永直
国際芸術ニュース1 ロシアの新オペラ									2
続労働市場									9
欺れたが									10
国際芸術ニュース2 英国に於けるプロ映画									23
欺くもの									31
街の子									32
社長の馬車									51
三人の壮丁									59
文芸時評 社会民主主義とは何か									65

国際芸術ニュース5 「ナツプ」の創刊										77
プロレタリア・レアリズムの現段階										78
それは如何なる方向へ進むべきであるか										78
原稿応募規定										83
プロレタリア映画が当面してゐるシナリオの形式										83
国際芸術ニュース4 世界プロレタリア革命小説選集										84
労働者の詩二篇										89
報告（ドイツー労働者）										90
層屋（支那一労働者）										90
鉄の綱領										92
法律										92
プロレタリア作家プロフィール(1)										95
プロレタリア作家論										97
片岡鉄兵論										98
貴司山治論										103
中野重治論										106
武田麟太郎論										110
立野信之論 —主として描写に就て—										118
山田清三郎論										120
鹿地亘論 主に「動員線」及び以後の作品について										124
橋本英吉論										128
小島勲論										132
越中谷利一論 —主として彼の足跡の上で—										135

断想
国際芸術ニュース3 アンリ・バルビュッス
の近作

反射鏡 ジャーナリズムの害毒
暴露短篇

重役は云つたが
動脈を操る職場
作家への公開状

『心理の春』を通じて細田民樹氏に寄す

正しかつた片岡鉄兵氏へ

細野孝二郎と其作品

女性のプロレタリア作家

鹿地亘君に問ふ

武田麟太郎の『党员』

資料 声明書

編輯だより

平林たい子

140
141

松田解子

142
145

細野孝二郎

145
145

井上哲郎

151
153

徳永喜生

153
153

森彬雄

154
155

力丸俊一

154
155

清国三郎

155
156

老労働者

156
157

労農芸術家聯盟

158
163

編集部

164
163

白揚社版『プロレタリア文学』について

昭和五年六月から八月まで、毎月五日発行で計三冊確認されている。左翼的商業出版社「白揚社」（東京市神田区美土代町二ノ一）発行。編輯兼発行人は中村徳二郎。印刷所は山田印刷所。定価三十五銭。日本プロレタリア作家同盟機関誌『プロレタリア文学』（昭和七年一月〜昭和八年十月）と直接の関係はない。

創刊号のカット、岡本唐貴、朝野方夫、竹本賢三、鈴木賢二。

同志社大学人文科学研究所・日本近代文学館所蔵原本を参看した。

（村田裕和）

*「ワ」は、濁点あり